

“回 想”

モータースポーツの聖地
浅間高原

“浅間高原自動車テストコース”
その存在ともたらした功績



1955年11月5~6日の2日間“国産車の性能向上と輸出振興”を狙って日本小型自動車工業会の主催による“第1回全日本オートバイ耐久ロードレース”(通称:第1回浅間高原レース)が開催され 19メーカー81台が参加。

国産オートバイの技術・性能の向上を目的としていたため外国製オートバイの参加は認められず、参加規定には“全ての部品は国産であること”という一文があり、輸入部品を使用していた数台が失格処分となった。



浅間高原レース発祥の地碑

戦後の輸出立国をめざしてバイクの性能向上をはかるため通産省委託事業として公道を使用した第1回浅間高原レース [第1回全日本オートバイ耐久レース]が 1955年11月に開催された

- 5日 ライトウェイト級(250CC)
ウルトラライト級(125CC)
6日 ジュニア級(350CC)
シニア級(500CC)

第一回全日本オートバイ耐久ロードレース 1955年11月5~6日



コースは群馬県と長野県にまたがる全長 23km が計画されたが、長野県側の公道使用の許可が下りず、群馬県側のみの公道を閉鎖して開催。

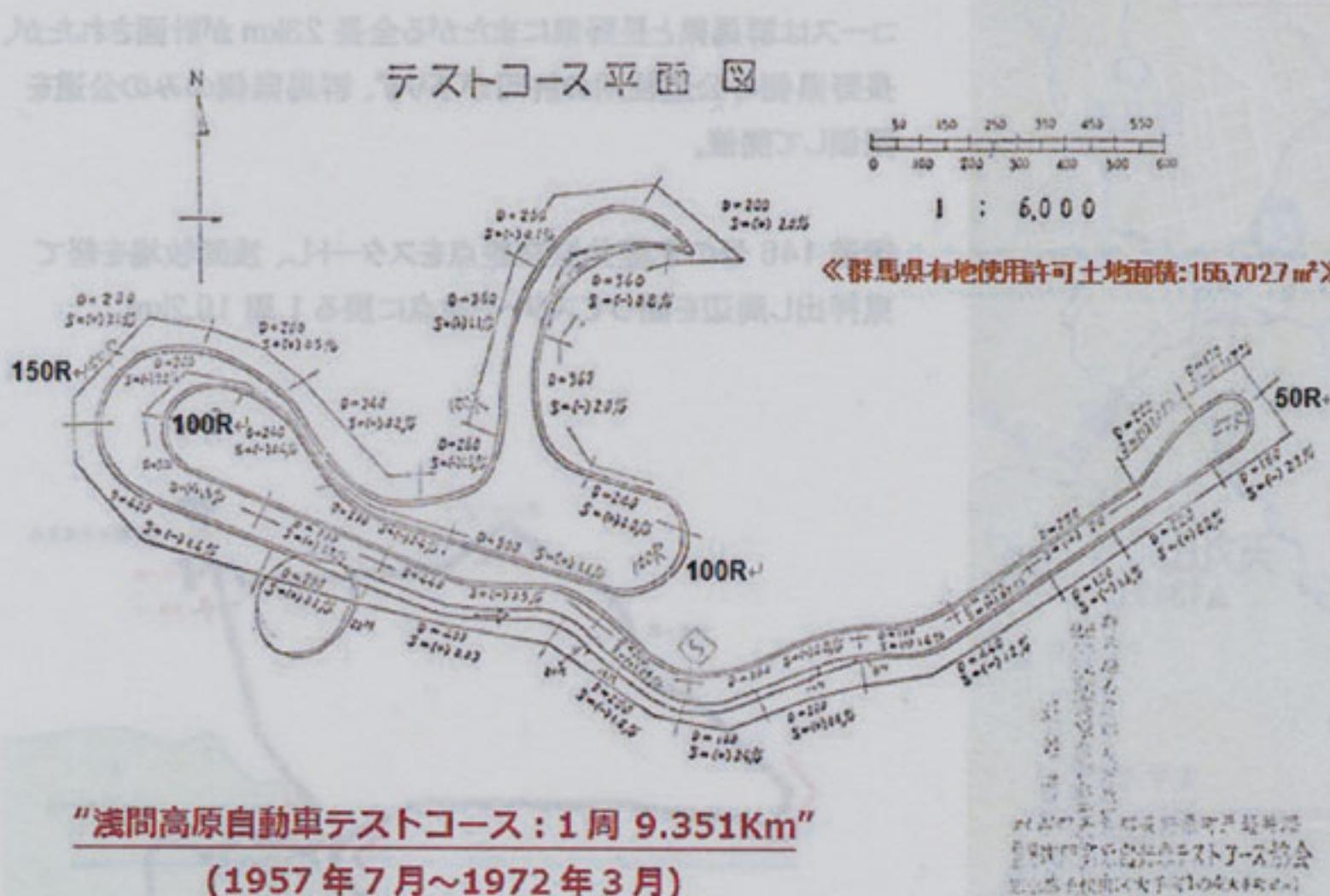
国道 146 号の北軽井沢交差点をスタートし、浅間牧場を経て鬼押出し周辺を回ってスタート地点に戻る 1 周 19.2km。



《右下の破線は 1957 年完成の浅間高原自動車テストコース》



浅間高原自動車テストコース完成 1957年7月19日

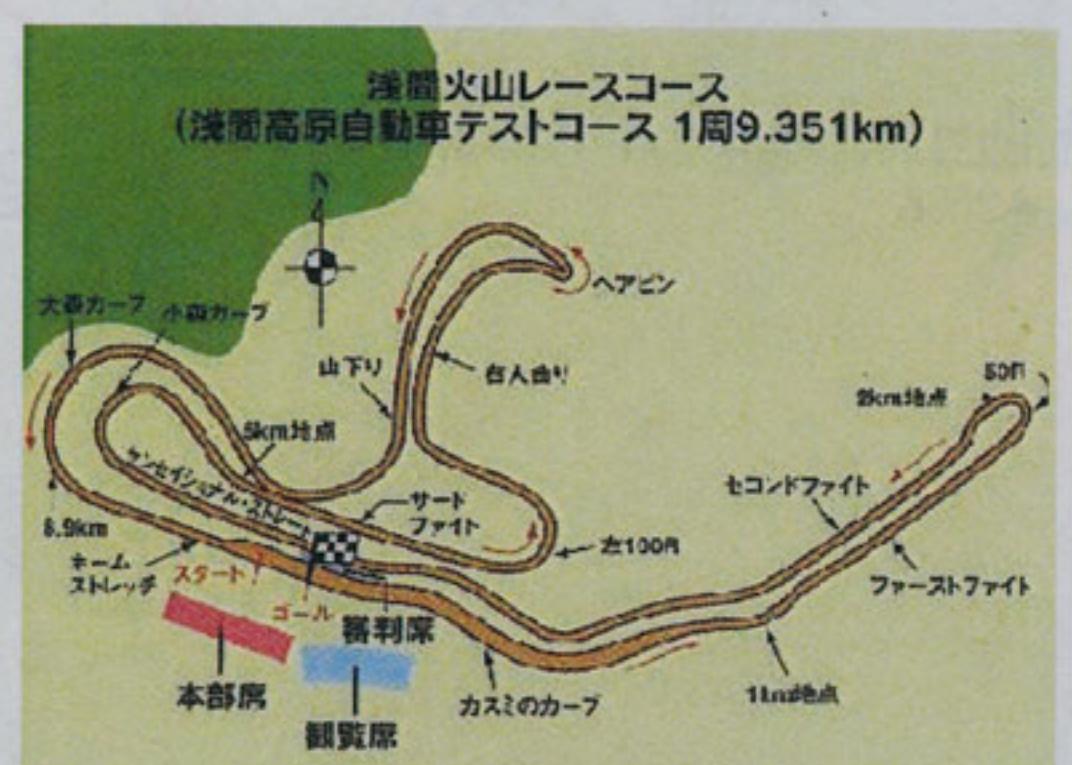


“浅間高原自動車テストコース：1周 9.351Km”
(1957年7月～1972年3月)



本格的なレース専用のコース建設への機運が高まり、社会的責任なども考慮して1956年(昭和31年)6月、国内二輪製造メーカー19社による“社団法人浅間高原自動車テストコース協会”が設立され、1957年7月浅間牧場敷地内に“浅間高原自動車テストコース(1周9.351km)”が完成した。

コースは群馬県と嬬恋村が所有していた牧草地を借り受け、テストコース協会と当時の通産省が建設費を負担し建設された。テストコースとして建設された為、常設の観客席などは設けられていないかったが、実質的には日本初のサーキットと呼べるものであった。



第二回全日本オートバイ耐久レース 1957年10月19~20日



浅間山を背にグリッドスタート



50Rへの進入(先頭はヤマハの大石選手)



大観衆のストレートを疾走する競技車

1957年10月19~20日(2日間)日本モーターサイクルレース協会の主催で、7月に完成したばかりの“浅間高原自動車テストコース(19.351Km)”で第2回全日本オートバイ耐久レース(通称:第2回浅間火山レース)が開催され、11社から70台が参加。ホンダとヤマハの熾烈な戦いを観客は楽しんだ。

第2回大会終了後、第3回大会を1958年8月に開催すると発表したが、各メーカーの様々な主張により、車輪規則の調整が難航、次回大会は1959年となった。

第一回全日本モーターサイクルクラブマンレース 1958年8月24日



経済効果を期待し、北軽井沢に“クラブマンレース”歓迎の横断幕



45クラブから120台が参加



台風襲来の豪雨下でのレース

職業ライダー(ワークスライダー)しか参加できなかったことから、オートバイ専門誌“モーターサイクリスト”的主宰者であった酒井文人氏の積極的な取り組みによって、各地のオートバイ愛好家クラブを組織化した“全日本モーターサイクルクラブ連盟(MCFAJ)”が発足。

1958年8月24日、“全日本モーターサイクルクラブ連盟(MCFAJ)”の主催により浅間高原自動車テストコースで第1回全日本モーターサイクルクラブマンレース大会が行われ、全国から45クラブ120台が参加。台風の接近に伴う豪雨という最悪のコンディションであったにも拘わらず、3万人近い観客が集まった。

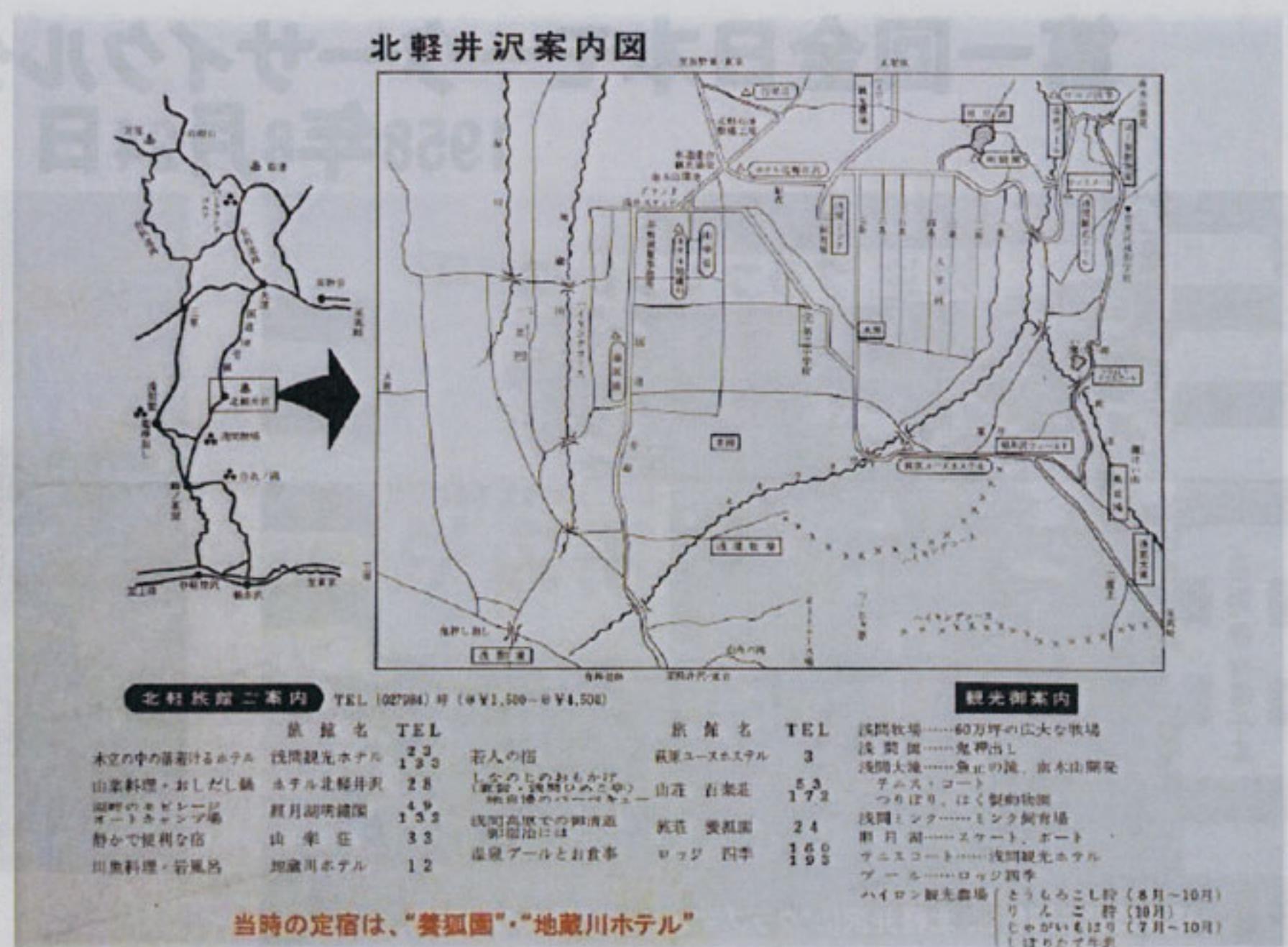
第三回全日本オートバイ耐久レース (併催:第二回全日本モーターサイクルクラブマーレス) 1959年8月22~24日



第3回全日本オートバイ耐久レースは、第2回全日本モーターサイクルクラブマーレスとの併催となり、8月22~24日の3日間開催された。クラブマンレース(22日)で好成績を挙げたアマチュアライダーには、ワークスライダーの争いである耐久レースに招待選手として出場できるという特典が与えられた。

ホンダは、この大会にマン島用マシンをベースにした125ccDOHC2気筒のRC142、250ccでは国産初の並列4気筒のRC160を持ち込んで必勝を期した。RC160(推定40ps)の速さは圧倒的でホンダが上位を独占した。

ところが125ccクラスでは、クラブマンレースの125ccと250ccでダブルウインを飾って耐久ロードレースに招待出場した北野元が、市販のCB92を改造車した車輛で、ワークスマシンRC142を駆るワークスライダーたちを打ち破って優勝、翌年はホンダワークスに迎えられてその後ロードレース世界選手権に参戦することとなった。



高性能化していくオートバイにとって、未舗装コースである浅間高原自動車テストコースは安全性を確保することが難しいことから“浅間高原自動車テストコース協会”は、その後のレースの開催を認めず“全日本オートバイ耐久レース(浅間火山レース)”は1959年の第3回大会が最後となった。

浅間高原自動車テストコースは二輪/四輪メーカーのテストコースで、四輪メーカーの協力によって舗装路にする計画もあったが、舗装計画は実現しなかった。

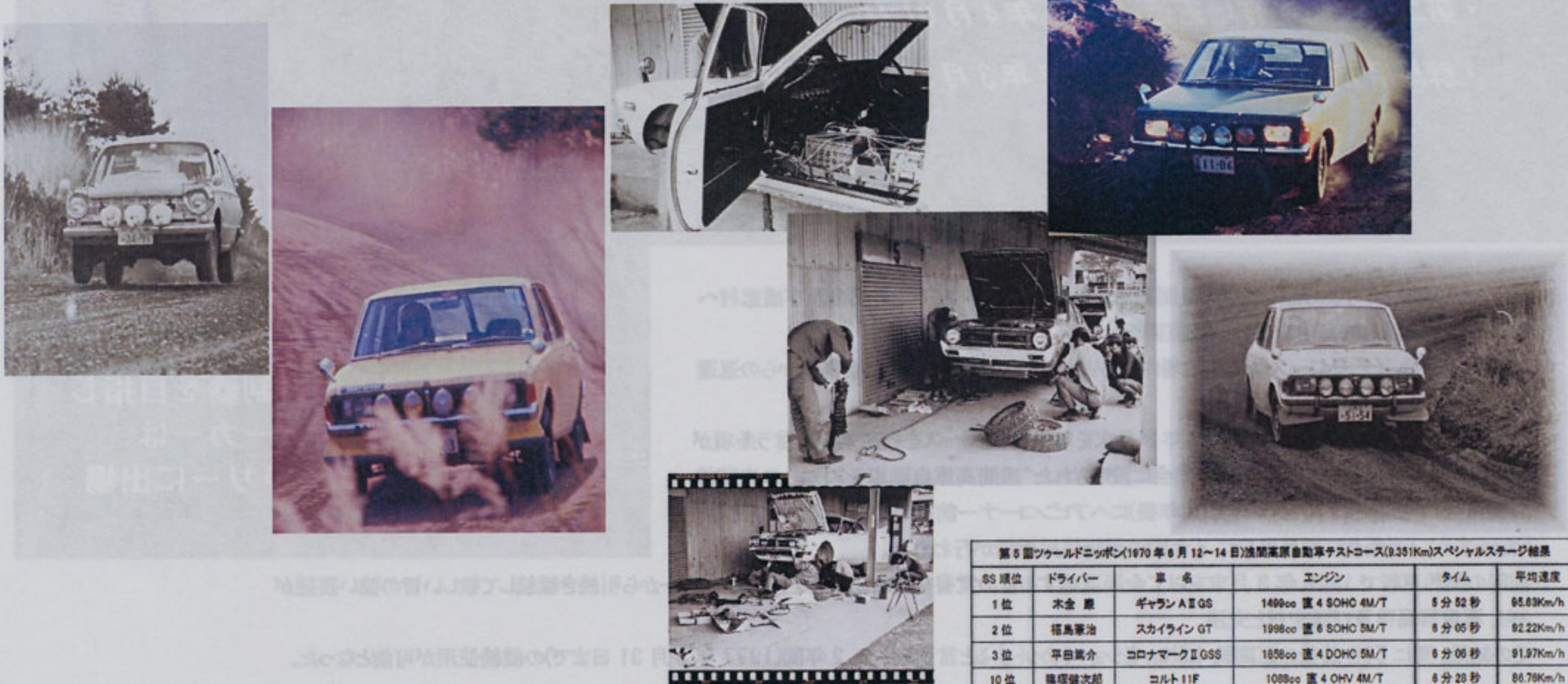
1962年、ホンダは三重県鈴鹿市に日本初の国際規格である鈴鹿サーキットを完成、同年11月に“第1回鈴鹿全日本ロードレース”を開催、1965年には船橋サーキット、1966年には富士スピードウェイと本格的なサーキットが次々と完成し、浅間高原自動車テストコースはレース場としての役目を完全に終えた。

…モータースポーツ技術と人材育成に貢献…

浅間火山レースはダートコースであったことに加え標高が1,000メートルを超える空気が薄くエンジンの出力が出ないという問題はあったが、これが逆に日本のオートバイの総合性能向上並びにライダーのテクニックの向上に寄与したと言える。

一方、鈴鹿サーキットでの日本グランプリ開催に備え、手探り状態であった四輪メーカーは二輪でレース経験のあるライダーをスカウト、田中健二郎、望月修、鈴木誠一、益子治、北野元、田村三夫、生沢徹らが第2回日本グランプリに出場。また、高橋国光、砂子義一、大石秀夫らも後に四輪レースで活躍することとなった。

レースイベントが開催されなくなったことから、浅間高原自動車テストコースは、1960年代後半から海外市場でのブランド構築を目的に海外ラリーに出場する日産・三菱・スバルなどの四輪メーカーに最適な高速ダートのテストコースとして頻繁に使われることとなった。



第5回ツールドニッポン(1970年8月12~14日)浅間高原自動車テストコース(9.351Km)スペシャルステージ結果					
SS順位	ドライバー	車名	エンジン	タイム	平均速度
1位	木全 雄	ギャランAⅢGS	1499cc 直4 SOHC 4M/T	5分52秒	65.03Km/h
2位	福島豪治	スカイラインGT	1998cc 直6 SOHC 5M/T	6分05秒	62.22Km/h
3位	平田篤介	コロナマークⅡGSS	1856cc 直4 DOHC 5M/T	6分06秒	61.97Km/h
10位	黒堀盛次郎	コルト11F	1088cc 直4 OHV 4M/T	6分28秒	66.78Km/h

浅間高原自動車テストコースの変遷



浅間高原自動車テストコース

«北緯36度25分2625秒 / 東経138度34分5286秒»

- ・完成 : 1957年7月19日 (9.351Km)
- ・第一次群馬県有地返還 : 1972年4月01日 (6.84Km)
- ・第二次群馬県有地返還 : 1975年4月01日 (5.04Km)
- ・群馬県有地全面返還 : 1977年3月31日 (閉鎖)



1977年3月
浅間高原自動車テストコース閉鎖

- ・1957年(昭和32年)に完成された“浅間高原自動車テストコース”は、群馬県及び嬬恋村へ3年毎に土地使用許可申請を行い継続更新。
- ・浅間高原自動車テストコースは浅間牧場内にあり、牧草地を確保する為に群馬県からの返還要望が1967年頃から出された。
- ・1969年3月の契約更新時に、1972年3月末を以て“全面コースを返還する”と言う条項が付されたが、社団法人日本自動車工業会に設けられた“浅間高原自動車テストコース走路検討委員会”で審議、1975年3月末(3年後)にヘアピンコーナー前後の区間約2.5Kmをショートカットすることを条件に群馬県庁に3年間の継続使用折衝が行われた。
- ・前回の契約更新で1975年3月末を以て全面返還する旨の覚書を提出したが、自動車メーカーから引き続き継続して欲しい旨の強い要望があり、再度群馬県及び嬬恋村と交渉。
- その結果、更に50R前後の区間約1.8Kmをショートカットすると言う条件で、2年間(1977年3月31日まで)の継続使用が可能となった。

浅間高原自動車テストコースで得た
経験と技術的蓄積を基に
世界ラリー選手権の制覇を目指し
日本の自動車メーカーは
歐州のスプリントラリーに出場



人と技術を世界の舞台に送り出した
“浅間高原自動車テストコース”

国際舞台で通用するブランド構築にも貢献
ありがとう浅間高原!!!